

問題1 次の文章を読んで、「A I 美空ひばり」に対するあなたの考えを600字で述べなさい。

昨年末に放送された「NHK紅白歌合戦」で、一九八九年に死去した美空ひばりの「新曲」が披露された。これはヤマハの専門スタッフがA I（人工知能）の技術によって美空ひばりの歌声を復活させ、秋元康が作詞を担当することで実現した。曲名は「あれから」。歌の間には「お久しぶりです。あなたのことをずっと見ていましたよ。頑張りましたね。さあ 私の分まで、まだまだ頑張っ」て」という語りが挿入されている。

この曲が完成するまでの過程は、二〇一九年九月二十九日のNHKスペシャル「A I でよみがえる美空ひばり」で紹介された。放送後、感動したという声とともに、死者を冒瀆（ぼうとく）しているとの批判も湧き上がった。

武田砂鉄は「A I 美空ひばりへの違和感」(cakes、2020年1月8日)の中で、「感動させる目的で死者に新しい言葉を与えてはいけない」と批判する。「カリスマ的な故人に、誰かにとって都合の良い言葉を新たに獲得させ、その言葉によって感情を揺さぶらせ、『神々しさ』まで感じさせるというのは極めて危うい」

秋元は、NHKスペシャルの中で、曲の間のせりふ部分こそ「いちばん伝えたかった所」と言い、「ひばりさんから『よく頑張ったわね』と言われたら、日本中がまだ頑張ろうと思える」と述べている。武田曰（いわ）く「これは『美空の願い』ではなく、『秋元の願い』」である。

故人の言葉を創作し、自己の願いを仮託して語らせることは危険だ。同様のことが、カリスマ的独裁者やカルト的宗教家を使って行われた場合、その危うさは計り知れない。

生前の美空ひばりと親交が深かった中村メイコは、十二月十七日のニッポン放送「垣花正 あなたとハッピー！」に生出演し、「A I 美空ひばり」について語っている。その時の発言が、ニッポン放送のウェブページで紹介されているが（「“A I 美空ひばり”は『嫌だ』 親友の中村メイコ語る」2019年12月23日）、記事によると、中村はまず「怖い」と言い、美空ひばりが「離れる気がする」と語ったという。

ここで中村は、A I 制作者や秋元に敬意を表しながらも、「一番単純な言い方をすると『嫌だ』。やっぱり本人がここにいて本人が歌ってほしい」と述べている。そして、「心の中にもう一部屋、あの人が作ってくれたの。死んだら隣のふすまを開けるとあの人がいるって思うんです」と語っている。

中村にとって、美空ひばりは心のふすまの向こうに隣在している。故人となった美空ひばりは、いなくなったのではない。死者として傍らに存在している。時に言葉にならない会話を交わしながら生活をともにしている。中村は、常に死者の気配を感じ、死者とともに生きているのだ。

だから、「A I 美空ひばり」が何かを語り、何かを歌うことに対して、率直な違和感を

表明する。「嫌だ」という言葉を絞り出す。「A I 美空ひばり」は、美空ひばりを遠ざける。それは、どこまでも「美空ひばりのようなもの」にすぎない。紛（まが）い物によって美空ひばりが「離れる気がする」。中村は、それが「怖い」のだ。

中村にとって、「A I 美空ひばり」は死者を生き返らせる行為ではなく、死者を排除する行為なのだろう。大切な存在が奪われたという感覚を持ったのだろう。

死者はままならない存在だ。不意に厳しい眼差（まなざ）しを投げかけ、私たちに反省を促す。時に意図しない形で私たちを包み込み、安堵（あんど）感をもたらす。死者をコントロールすることはできない。死者は生者の意思によって所有することのできない存在なのだ。

A I による死者の再現は、死者を所有しようとする行為にはかならない。死者の言葉を創作し、都合のいいように利用することは危うい。死者を利用の対象とするとき、私たちは過去を軽視し、現在を特権化する。今生きている人間が、死者を操作し、改変できると過信する。死者への畏れを喪失した時、死者が積み重ねてきた英知までも、やすやすと破壊しようとする。

私も「A I 美空ひばり」が怖い。

(2020年1月29日中日新聞夕刊より)

オリジナル問題

問題2 次の文章は2016年6月3日付中日新聞に掲載された本学に通うベトナム人留学生の投稿です。この学生の疑問にあなたならどう答えますか。800字以内でまとめなさい。

店員 なぜ理由なく謝る

グエン・ティ・バン・トゥ 大学生（名古屋市昭和区）19歳

ベトナムからの留学生である私は、日本人の接客態度を不思議に思う。日本人の店員は、何でもすぐに謝ってしまうからだ。

確かに日本では「お客様は神様」と言われ、そのことを当然と考えるかもしれない。例えば先日、アルバイト中に受け取る商品を間違えて持って行った客がいた。私は商品を渡すとき、それで間違いないかを確認した。しかし、注文した物とは違っていたらしく、しばらくして「頼んだ商品じゃないじゃないか、金を返せ！」と言って店へ戻ってきた。

日本人のバイト仲間は、その場を収めるためにすぐに謝って、お金を返した。しかし、間違えたのは客だったので、なぜその店員が謝ったのか、理解できなかった。ベトナムならば、店員は客に説明し、解決する方法を考える。理由もなく、すぐに謝ることはしないだろう。

客と店員が対等な立場にいることも、重要ではないだろうか。日本の文化に戸惑うことも多いが、今後も両国の文化の違いを学びたいと思う。

2016年 名古屋市立大学人文社会学部（公募）